

《嘘つき》は誰だ？

占い師

村で有名な占い師。「神の提言」と謳って言葉巧みに人々を翻弄している。腕は確かだが抜けていることが多い。プライドが高く頑固であり、しばしば目の前が見えないことがある。自分に都合が悪くなると神の名を出して急に早口になる。一人称はわたくし。

男旅人

国中を女旅人とともに旅してまわっている。旅の途中で他の三人と出会い、一時的に世話になっている。行動力があるが、直感だけで行動がち。国一周旅もちろん思いつき。単純だがパートナー思い。虫が嫌い。一人称は僕。

女旅人

男旅人とともに旅をしている。気が弱く、自己主張が苦手。男旅人の旅が心配でついてきた。手先が器用で、裁縫へのこだわりだけは譲れない。主張が強い踊り子が少し苦手。一人称はわたし。

狩人

面倒見がよく頼もしい狩人。土地勘に優れている。大家族の長男らしい。感情的になりやすい。デリカシーがない。一人称は俺。

踊り子

場を明るくするのが得意。大人な女性。気が強く歯にも着せぬ物言い。素直じゃない。隣町から出稼ぎにきた。一人称はあたし。

## Ep.0

占い師イリ、サス。占い師の台詞の途中で他の登場人物もイリ。

占い師「ここは町はずれのとある村。大人たちは今日も家業に励み、小道では子供たちの遊ぶ声が響き渡っている。あ、申し遅れました。私はこの村で占い師をしている者です。今日も今日とて神のありがたきお言葉を村の皆さんにお伝えしています。

ここで私がともに生活を送っている仲間たちをご紹介します。

こちらは踊り子さん。少し物言いはきついですが、優しい方です。

次に狩人さん。いつも私たちのために食料を調達してくれています。とても頼もしい方です。そして二人の旅人さん。なんでも国を一周なさるようで、ひと時だけでも暮らすことになりました。彼の話は聞いていて飽きませんね。彼女のほうはおしとやかで、とても思いやりの心をお持ちなのが伝わってきます。

この方々とともに、私は毎日素敵な日々を過ごしています。さて、

私たちを含め村の誰もが、この平穏な日々が永遠に続くと思っていた。

しかし……！！！！！！

これは、そんな村に突如起こった、少し変わった物語」

一瞬暗転したのち、明転。EP.1へ。

占い師「この中に、嘘をついている人がいる」

「[[[[えっっっっっ]]]]」

狩人「何言ってるんだ急に？」

男旅人「ど、どういうことだ」

踊り子「どうせいつもの妄言でしょ。放っておきなさいよ」

占い師「これは真実よ。神からのお告げだわ」

「私たちの中の誰かが、嘘をついている」

女旅人「ほ、本当なの？」

男旅人「嘘だって・・・？僕たちは信頼できる仲間同士じゃなかったのか？」

踊り子「はっ、じゃあ聞くけど、誰が、どんな嘘をついてるっていうんだい？」

占い師「・・・それは神が私たちに与えた試練・・・ここまでお導きくださっているとい

うのにさらに求めるとはなんて強欲な！あああ愚かな人間どもよ。自ら真実を明ら

かにすることが救われる唯一の術・・・」

狩人「つまり、そこまではわからないってこったな。」

踊り子「なんだいそりゃ。」

男旅人「でもこの占い師さんの言う『お告げ』は当たるって町でも評判じゃないか。この

間だって僕が探していた帽子を占いの力であつという間に見つけてくれたんだ

よ」

踊り子「なあにが占いの力だよ。あんた、自分で帽子かぶったまま捜しまわってたじゃな

いか」

男旅人「なっなぜそれをつっ！！まさか踊り子さん、君も霊力を持っているのか

い・・・？」

踊り子「会話にならないね」

女旅人「で、でも彼の言う通りよ。占い師さんの腕は確かだわ」

踊り子「ここに来て間もないひよっこちゃんたちに言われてもねえ」

女旅人「ひえっ・・・ごめんなさい・・・」

狩人「まあまあ。お前だって世話になってるだろ？あいつが雨乞いしてくれなきゃ村全員

ぶっ倒れるところだったんだから。ま、認めたくないのはわかるけどな。」

女旅人「じゃ、じゃあ、やっぱり誰か嘘をついているの・・・？ひどい」

狩人「俺たちの間では隠し事はしない。ここで一緒に生活するためにみんなで決めたことじ

ゃないか。今なら許してやるから、名乗り出してくれないか・・・？」

踊り子「・・・そうやってすぐ兄貴面するところ、いけ好かないんだよ。ンなこと言って本

当はあんたが嘘をついてるんじゃないのかい？」

狩人「なんだと！？俺がそんなことっっ」

占い師「落ち着きなさい。争いは何も生まないわ。」

踊り子「っつ、自分で蒔いた種のくせによくもまあ・・・」

占い師「これは裁きを下す必要があるよね。この中の『嘘つき』を、私があぶりだしてあげる!!!」

## Ep.2

男旅人「おおお！なるほど・・・って、どうするんだ？」

占い師「まず問題なのが、誰が嘘をついたのかってことね」

踊り子「それがわかりゃあ苦労しないよ」

狩人「占い師さん、あんたさつきから番人でも気取っているのか？」

男旅人「まあまあ、なんか面白そうじゃないですか」

占い師「ここは今まで起こったことを順番に、整理していく必要がありますね。記憶を遡ってみましょう」

女旅人「い、今までっていつからですか・・・？そんなに昔のことは覚えてないし・・・」

占い師「神のお告げによると、嘘つきが現れたのは昨日の朝より後。そこから辿っていけばいいわ。」

踊り子「なんでそこまでわかってて犯人がわかんないんだか・・・」

狩人「こいつは昔から大事などが抜けてるからなあ」

占い師「お静かになっ!!!神は我々に試練を与えてくださっているのだ!!!それに現場再現は捜査の基本よ。『真実はいつも一つ!!!』って一回言ってみたいじゃない

の!!!あんなクサイ台詞、こういう時じゃないと恥ずかしすぎて言えないんだからっつ」

男旅人「真実は・・・なんだって？」

占い師「みんなも一度は言いたくなかったことがあるんじゃないかって??」

踊り子「こんなわけわかんないこと言ってる奴なんか放つといて、さっさと進めようじゃないか」

女旅人「でも、再現ってどうすれば・・・」

占い師「それは問題ないわ。私の力をとくとご覧あれ!!!」(指をかつこよく鳴らす)

## Ep.3

(回想シーンも、役者は当時のように動く。小道具なし、すべてマイムでOK。気になるところがあつたら回想中でも随時中断して協議)

踊り子「え、何この照明」

占い師「(食い気味に) 昨日の朝、私たちはいつものように朝食をとっていた。料理当番は狩人さん」

狩人「よし、俺特製朝飯、一丁上がり!!!」

男旅人「うわあ、おいしそうな匂いだな。これは何だい？」

狩人「今朝捕ってきた新鮮な鹿肉のステーキ♪パセリのソースがけ♪(イケボ)」

女旅人「あ、朝からすごく豪華ですね・・・」

踊り子「ちよつとお、私バセリ嫌いだっていつも言ってるだろう。どうしてくれるんだい。」

狩人「好き嫌いはよくないぜ。そんなにパセリの味はしないからさ。」

踊り子「しないんだったら入れなければいい話だろう？入ってる時点で味がするに決まってるじゃないか」

占い師「そんなことより、早くいただきますしよ。せっかくの料理が冷めてしまいます」

狩人「そうだそうだ。文句は食ってから言ってくれや」

男旅人「やったあ、いっただっきまーす!!!」

## 食

占い師「皆さんは、今日はどういったご予約で？」

狩人「俺は山まで行って薪を切ってくるよ。そろそろ寒くなるだろうからな」

男旅人「僕はちよつと隣町まで」

踊り子「・・・あたしゃあいつも通りだよ。店の準備さ」

女旅人「・・・」

占い師「貴方は何を？」

女旅人「あ、えつと・・・部屋で針仕事をしようかと・・・」

踊り子「おやあ？これは怪しいんじゃないかい？」

女旅人「うえつっ!？」

踊り子「だってあんた、夕方ごろに外から帰ってきたじゃないか。仕事に行く前にこの目でしっかりと見たんだよ。針仕事しようだなんて嘘で、本当はどっかで悪いことでも

してたんじゃないかい？え？」

女旅人「ち、違います!!! 針仕事してたら糸が切れちゃって、それで町まで買い出しに・・・」

踊り子「へええ、普段めつたに外に出ないあんたが??」

女旅人「ほ、本当です・・・。買ってきた糸だっておりますし、作りかけだって・・・」



男旅人「僕も支度をしなくちゃ」

(狩人、男旅人が部屋から出ていく)

占い師「(占い中)なるほど、今日は夕方から雨ですか・・・」

女旅人「(皿を洗いながら)あ、そうなんですわね。彼らにも伝えておかないと・・・」

踊り子「じゃあ今日は店が繁盛するかもねえ」

占い師「おや、どうしてそう思うのですか？」

女旅人「雨なら普通、お客さん来ないはずじゃ・・・」

踊り子「それは朝っぱらから降ってたらの話だよ。途中で降りゃあ雨宿りがてら寄ってく  
れる客が増えるんだ。うちの店は村と町の間にあるからねえ」

女旅人「へええ、そ、そうなんですわね・・・」

占い師「よく考えていらっしやるのですわね」

踊り子「はっ、こんなの赤ん坊でもわかる話だよ」

「というわけで忙しくなりそうだ。あたしももう行くよ」

占い師「ああ、念のため傘をお忘れなく」

踊り子「うるさいねえ、わかってるよ」

女旅人「・・・私もそろそろ部屋に戻ります・・・」

占い師「そうですね。よい一日を」

女旅人「あ、あのう・・・」

占い師「?どうかされましたか??」

女旅人「あ、いえ・・・占い師さんは今日は何をなさるんですか・・・?」

占い師「ああ、私はここで神に祈りを捧げています」

女旅人「え、一日中ですか・・・?」

占い師「ええ。冬の式典が近いので」

女旅人「・・・そ、そうですね・・・では・・・」

(占い師瞑想モード、男旅人・狩人袖から顔を出す)

男旅人「へえええっっ!一日中そんなことしてたのかい占い師さん!いつも昼は出かける

からわからなかった!!」

狩人「昔っからこんな感じだよ。あいつにとってはこれが普通だ」

男旅人「はたから見たら一番怪しいけど・・・」

狩人「そう言ってるなよ。ま、言い出しっぺのあいつが嘘をついていることはなさそう

だな・・・」

(男旅人・狩人引っ込む)

(雨音)

占い師「おや、もうこんな時間か。神が恵みの雨をもたらしてくれている」

「そろそろ狩人さんあたりが帰ってくるころですかねえ」

(狩人、急いで帰宅)

狩人「はあ、はああ、こんな土砂降りなんて聞いてねえよお」

占い師「お帰りなさい。お告げ通り、雨が降りましたね」

狩人「わかってたんなら先に教えといてくれよなあ…」

占い師「おや、私としたことが、貴方にお伝えするのを忘れていました」

狩人「なあにが『私としたことが…』だ。いつも抜けてんだからよお。肝心なところで役に立たねえなあ」

占い師「周知は管轄外ですので。女性に向かってそんなことを言うなんて、他の方にモテませんよ」

狩人「知るかよ」

占い師「薪はとれましたか？」

狩人「取れるには取れたけど、この雨のせいで濡れちまって全部パアだ。また何日か乾かしてから運ばなきゃならねえ」

占い師「それはそれは。ご足労様です」

狩人「はああ…あつ、そうだ」

「明日から一週間、雨は降るか??？」

占い師「…(ニコッ) いいえ。明日からはしばらく快晴ですよ」

狩人「ありがとうございます」

女旅人「えっとお…お邪魔して大変申し訳ないのですが…」

占い師「どうしましたか？」

女旅人「いや、土砂降りの中、傘を持って行ってなかったわりには狩人さん、濡れていらつしやらないなあって…」

男旅人「あ！そういえばそうだな」

踊り子「どうなんだい??」

狩人「ちよっと待ってくれ、もしかして俺を疑ってるのか？」

踊り子「もしかしなくても。この状況じゃああんたしかいないだろう。文句があるならちやんと説明しな」

狩人「ちよほど山小屋に使ってなかった古いマントがあったんだよ。濡れて風邪でもひいたら面倒だから、拝借してきたんだ」

女旅人「そ、そんな都合のいいことあるんでしょうか…?」

狩人「はあああつ?!?それが事実なんだからしょうがねえだろ!!」

女旅人「ひええ…」

男旅人「ま、まあまあ落ち着いて」

占い師「彼の言っていることは真実ですよ。ご丁寧に玄関に立てかけられていました」  
狩人「ほらな!!! だから言っただろ!!!」

男旅人「ラッキーだったなく僕なんかしばらく店で待ちぼうけ食らっちゃってさあ」

踊り子「にしてもお二人さんは仲いいんだねえ」

占い師「昔馴染みですから」

女旅人「素敵ですね」

狩人「別にそんなにいいもんじゃねえよ」

占い師「ああもう、『裏切者』は一体誰なんでしょう……(指を鳴らす)」

## Ep.5

男旅人「ただいま」

女旅人「おかえりなさい……」

占い師「おや、ずいぶん遅いんですね」

男旅人「ま、まあ。途中雨宿りしてたからかな。目当てのものもなかなか決めきれなくて」

占い師「何を買ったのです？」

男旅人「そりゃあもちろん、愛しのスネークちゃんの剥製に決まってるだろう？(ヘビを

取り出す)この美しいラインに見惚れていたら時間があつという間に……」

狩人『もちろん』なのか、それは」

女旅人「なんでまた急に……」

狩人「まあこいつは何しでかすか分かったもんじゃないからな」

男旅人「あははは、そんな言われると照れちゃうなあ」

占い師「褒めてはないと思われませんが……」

女旅人「いっつもこんな調子だから心配なんですよ。急にどこかに行っちゃうんだから。

目を離したらいなくなってしまいうんじゃないか心配で……」

狩人「あんたも苦労人だねえ」

踊り子イリ

踊り子「はああああ、疲れたったらありゃしない」

占い師「おや踊り子さん、おかえりなさい」

男旅人「なんか機嫌よくないけど、どうしたんだい？お客さんが来なかったのかい」

狩人「それとも、狙ってた奴でも取られたのか？」

踊り子「(狩人を睨む) 店自体は繁盛したさ。ただ客の態度が気に食わなかっただけだ

よ」

男旅人「どんな客だい？」

踊り子「うちの新人りにちよっかいかけてきたから止めに入ったら、金目当てのよそ者は

黙ってるよさ。最近はお嫁ぎの人も増えてるから風当たりは少なくなったけど、ま

だ頭の固い奴らはいるもんだよ。結局、みんな自分が偉いと思ってるのさ」

女旅人「そ、そんな……ひどいですね……」

踊り子「ま、金はしっかり落としてくれるもんだから何も言えないけどねえ。客商売も楽じゃないんだよ」

狩人「そりゃ災難だったな」

占い師「それで、その方はどうされたんですか？」

踊り子「お客さんなんだから無下にはできないだろう。笑ってやり過ぎしたんだよ。こう見えて商売は長いもんでね」

占い師「ふむふむ・・・」

男旅人「どうしたんだい？」

占い師「踊り子さん、先ほどの発言は本当ですか？」

踊り子「はああ？何言い出すんだい」

占い師「腹の立つ客を笑ってあしらう・・・普段の貴方からは想像つかないのですが」

踊り子「はあああ！！！！？」

女旅人「た、確かにここだとすぐ大きな声を・・・って、すすす、すみませんなんでもないです」

踊り子「(女旅人を睨む) はあ、あんたたち、私がどこでもかしこでもこんな態度だと思ってるのかい？生憎、そんなおこちゃまじゃないんだよ。家からほとんど出ないあんたたちと違ってねえ??」

占い師「今更そんな強がりを通じるとでもお思いですか？もうここまで来たら嘘をついている『罪人』はあなたしかいないじゃないですか！」

踊り子「何言ってるんだい！！自分の推理が当たらないからってデタラメ言ってるんじゃないよ！！！」

占い師「デタラメではないつつつこれは神からのお告げだ。むしろくしゃしてお店でお暴れにでもなつたんじゃないんですか？みんな、貴方の癩癩には頭を悩ませているですよ」(他の人々は目をそらす)

踊り子「なつ、言いがかりはよしな！！あたしはね、最初っからあんたが怪しいと思ってるんだよ！！『神のお告げ』なんてよくわからないことごちゃごちゃ言いやがって。どうせハツタリなんだろう!？」

狩人「おいおい、だとしたら何でこいつがこんなこと言う必要が・・・」

踊り子「そんなこと知るかい！毎度毎度振り回されるのはもう飽き飽きなんだよ！！このインチキ占い師が！！神なんて、いるわきゃないんだよ！！！」

占い師「つつつ！！私のことを馬鹿にするのは構わないですが、神を侮辱することは許さないつつつ！！！」

占い師『罪人』には、『罪人』には裁きを加えなければならぬのだ！！いい加減大人しくせよ愚か者！！！！」

Ep.6

男旅人「ちょ、ちょっと待ってくれないか」

踊り子「なんだい、しゃしゃり出てくるんじゃないよ。それともこの妄言女が真の『罪人』だって証言してくれるのかい？」

占い師「まだ言うか貴様・・・！」

狩人「おい落ち着けて」

男旅人「・・・『罪人』は僕だ」

踊り子「は????」

女旅人「え・・・？」

占い師「ど、どういうことですか、あんな女を庇うなんて・・・」

踊り子「はっ、そんな殊勝な振りしなくなっただよ、旅人さんまで手玉に取ってんのかい、占い師さんよお」

占い師「何を寝ぼけたことを！私は民衆を導いているまで・・・」

踊り子「はいはい、健全な村人を己に酔わせてご満足かい？旅人さんも可哀そうに・・・」

男旅人「違う!!!!!!」

「・・・僕が嘘をついた。昨日の夜、みんなに」

女旅人「ほ、本当なんですか・・・？」

男旅人「・・・ああ。まさかこんなに大変なことになるなんて思わなかったんだ。本当はまだ隠しておくつもりでいた。でも僕のせいで、みんなの仲が悪くなる様子なんか見たくない。本当にごめん」

女旅人「・・・」

踊り子「っ、嘘つきの『罪人』のくせに、しおらしくなってんじゃないよ・・・」

狩人「そこまで反省するなら、初めから嘘をつかなくてもいいじゃないか」

占い師「(しばし占った後)・・・どうやら彼が嘘をついていたということは本当のようです」

男旅人「・・・」

占い師「『罪人』には裁きを加えるのが運命。それがここでの平穏な生活を保つために必要なこと」

女旅人「そんなっ、でも彼が悪いことするわけ・・・」

占い師「しかし、罪の重さは嘘の内容によります。旅人さん、あなたは、どのような嘘をついたのですか？正直に話してください」

男旅人「・・・」

「市場でヘビの剥製を買ったという話。あれが嘘だ。あれは咄嗟に、路地裏で拾った」

「本当は・・・」

女旅人「ほ、本当は・・・？」

男旅人「・・・・・・・・」

狩人「本当は・・・・？」

男旅人「・・・・・・・・」

踊り子「いや、さっさと言っとくれ!!!」

占い師「そうですねよ旅人さん。無駄にランタイムを伸ばさないでください」

男旅人「本当は・・・・つつつ、」(男旅人、女旅人の前に跪いてネックレスを取り出す)

「僕と、結婚してください!!!!」

狩人「え？」

占い師「はい??」

踊り子「はああああ!??」

女旅人「??????」

狩人「ちょっと状況が読めないんだが・・・」

踊り子「今そんな雰囲気じゃなかっただろう!? 気まぐれにもほどがないかい!??」

男旅人「本当は、このネックレスを探していたんだ。君にプレゼントしたくて」

女旅人「え、」

男旅人「どれが似合うか迷っていたら思いの外時間がかかってさ。でも渡す前に気付かれ

っちゃったら台無しだろう? それで・・・」

占い師「(咳払い) ええと、つまり、旅人さんが嘘をついていた理由というのは・・・」

占い師・踊り子・狩人「『プロポーズするためええええええ!!??』」

男旅人「そ、そんな大声で言わないでくれよ。恥ずかしいなあ」

女旅人「えと、あの、その・・・ええ!!・・・」

踊り子「そっちのお嬢ちゃんがシヨートしちゃってるけど」

狩人「まあこんなに急じゃしようがねえよなあ」

占い師「それで、お返事のほうはどうされるんですか？」

女旅人「あ、ええっと・・・そのう・・・」

「・・・・・・・・ごめんなさい」

男旅人「え？」

男旅人・占い師・踊り子・狩人「『ええええええええええ!!??????』」

占い師「な、なんでなんですか!!!!????今の流れ絶対『はい♡』っていう少女漫画コ

ースだったでしょう!??」

踊り子「ああもうあなたは黙つときな! こういう時の乙女は繊細なんだよ!! こんな手の

かかる気まぐれ男はごめんだってことだろう?」

男旅人「ぐはあつ (ダメージ)」

狩人「そういつてやるなよ嬢ちゃん。こいつは向こう見ずだし服のセンスは悪いし寝相も

最悪だが、思いやりのあるいいやつなんだ」

男旅人「ぐは、ぐは、ぐはあああつ・・・(連続ダメージからの死)」

女旅人「うえ！！あ、そうではなくて・・・！！！！」

占い師「・・・というと？」

女旅人「さっきのは、私の態度を謝りたかったんです。こんなにも私のことを思ってくれている彼のことを、一瞬とはいえ『罪人』扱いしてしまった・・・本当にごめんなさい」

男旅人「そ、そのことかい。いいんだよ。こそこそ嘘をついていた僕が悪いんだし」

女旅人「でも・・・」

踊り子「まあまあ、もとはといえばコイツ（占い師を顎で指しながら）が大袈裟に言いだしたんだから、悪いのは全部この女だろう？」

占い師「え、あ、ああ、や、やはり神のお告げは間違っはいなかったのだ！これで互いの疑いは晴れ、この村にも再び平穏が訪れるであろう！！むしろ神がここまで導いてくださったに違いない！！うん、そうだ！！よって、あなた方は神及び私に感謝の意を・・・」

踊り子「だからあ！！アンタが余計なことを言わなきゃあ、平和なまま旅人さんもプロポーズできたんだよっ！！！！」

占い師「う、うぐっっ」

狩人「ところで、プロポーズの返事のほうはどうなんだい？」

踊り子「はああ、あんたにはデリカシーってもんは無いのかい」

女旅人「そ、それは・・・ああ、わ、私テーブルクロスを完成させないといけないのでえっっ！！！！（赤面して逃げる）」

男旅人「あ、ちょっと待ってくださいよ！！！！」

男旅人、女旅人を追いかけてハケ

踊り子「おやおや」

占い師「あれは言わずもがなという感じですねえ」

狩人「あのままにしているのかい？」

踊り子「問題ないさ。きっと明日にゃあ素敵なテーブルクロスが完成してるだろうよ」

狩人「お、おう？それはいいんだが・・・？」

占い師「楽しみですねえ」

踊り子「はあああ、厄介ごとに巻き込まれてどっと疲れちゃったじゃないか。あたしは部屋に戻るよ」

踊り子ハケ

狩人「まったく、お前は面倒ごとばかり起こすんだからよお」

占い師「ふふ、まあ、退屈な日常よりは目が覚めるんじゃないですか？」

狩人「俺は平凡に過ごしてえや」

占い師「あ、そういえば、今度の冬の式典で村人同士の踊りがあるそうで」

狩人「踊りだあ？また村長はハイカラなもん取り入れやがって・・・」

占い師「男女二人組で披露するようですが、占いによると、狩人さんは私と踊らなければ  
ならないようです」

狩人「なんでまた」

占い師「さもなくば、むこう一か月は雨になるとか・・・」

狩人「ま、まじかよ」

占い師「ええ。神のお告げですから」

「私はどちらでも構わないのですが、一緒に踊ってくださいますか？ああでも、そ  
うしないと濡れた薪も乾きませんし、狩りにも出られませんねえ」

狩人「そ、それはマズい。早くその踊りってやつをやらねえと大変なことに・・・こうし  
ちゃいられねえ!!!!」

狩人ハケ

占い師、目線で狩人を見送る

占い師「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「なあんて、」

「これは嘘ですよ」

占い師、微笑む。暗転。

END

- ▼嘘つき↓裏切り者↓罪人と次第にエスカレートしていつている。全員が「嘘をついている」「悪い事」と認識している。
- ▼少し人狼ゲームっぽい。全員が疑心暗鬼になる。それにつれて互いの日頃の不安や不信感が爆発する。
- ▼互いの普段は気が付かなかった癖や本性を発見する。
- ▼ゲームや物語の中にいる雰囲気にしたいため、役名はあえて役職名のみになっている。